

死後の世界 第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか

この学び全体のアウトライン

第一部 死とは何か

- 第1章 人の構造
- 第2章 死についての聖書的理解
- 第3章 非物質的部分【霊魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

- 第1章 肉体の死後、人の霊魂はどこへ行くのか
- 第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

- 第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】
- 第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】
- 第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】
- 第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

第一部の内容

1. 第一部第1章：人の構造
 - (1) 人は物質的部分である「からだ」と非物質的部分である「霊魂」とから成る
 - (2) 霊魂は、「霊・魂・心・思考・意志・良心」の6つの要素と 墮落によって入り込んだ罪の性質である「肉」、合計7つの要素から成る
2. 第2章：死についての聖書的理解
 - (1) 肉体の死とは、人の非物質的部分である「霊魂」が肉体から分離することである
 - (2) 肉体の死のほかに、霊的な死と永遠の死がある
 - ① 霊的な死とは、神からの一時的な分離
 - ② 永遠の死とは、神からの永遠の分離
 - (3) このように聖書が教える死の特徴は、「分離」である。消滅とか、意識がなくなることではない。
 - (4) 死は、罪に対するさばきであり、良いことではない。神は、3つの死のうち2つ、肉体の死と霊的な死については、解決策を用意しておられる。
 - ① 肉体の死については、復活。霊魂が再びからだと結合される。そのときの体は、不死である。信者も不信者も、すべての人がこれを受け取る。
 - ② 霊的な死については、信仰による霊的な再生。神の恵みにより信仰を通して、罪の贖いを受け取ると、人は神の子とされ、神との交わりが回復される。そして、新しい性質がその人の霊魂に与えられ、6つの要素が日々新たにされる。
 - (5) 永遠の死については、解決策はない。不信者は、不死のからだを受け取ったのち、

永遠に神から分離された場所に行くことになる。

3. 第3章：霊魂の不滅

肉体の死によってからだから分離した霊魂は、消滅したり、意識がなくなるのではなく、不滅であり、その人の意識は明瞭に継続する。

では、肉体を離れた霊魂はどこに行くのか。これが、第二部第1章のテーマである。フルクテンバウム博士の論文「The Place of the Dead（死者の場所）」に基づく。

第二部第1章のアウトライン

1. 目に見えない世界を指す用語（13の用語のうち前回は4つ扱った。本日は5番目から）
2. 旧約時代における死者の行先
3. メシア昇天以降の現代における死者の行先
4. 将来における死者の行先

■目に見えない世界を指す用語【13語、「地獄」を除いて12の用語は聖書に中にある】

1. シェオル（ヘブル語）＝日本語訳聖書（新改訳）では「よみ」
 - (1) 詩 89：48「いったい、生きていて死を見ない者はだれでしょう。だれがおのれ自身を、シェオルの力から救い出せましょう」 → 義人も、そうでない人も共に、シェオルに行かねばならない。
 - ① 聖書において、義人とは神を信じる人、そうでない人とは神を信じない人である。
 - 神の前に立ったとき、自分の行いによって正しいと判定される人は、歴史上、唯一人メシアだけである。
 - メシア以外の人はずべて、神の恵みにより、信仰を通して、救いを受ける。その救いとは、私の罪が神によって備えられた犠牲の上に負わされ、神の義が私に与えられて、私を神の前に正しいと宣言してくださることである。恵みにより、とは、自分の行いによらず、無代価で、ということ。
 - ② 旧約の聖徒たちの行先として・・・創 37：35、42：38、44：29、31、ヨブ 14：13、詩 16：10、ヨナ 2：2
 - ③ 義人ではない人の行先として・・・民 16：30、33、ヨブ 24：19、詩 9：17、49：14、エゼ 32：21
 - (2) ヨブ 24：19、詩 9：17、49：14 → 不信者にとっては恐ろしい場所である
 - (3) 申 32：22「わたしの怒りで火は燃えあがり、よみの底まで燃えて行く」、詩 86：13「それは、あなたの恵みが私に対して大きく、あなたが私のたましいを、よみの深みから救い出してくださったからです」 → 下線部を直訳すると「シェオルの最も低いところ」。シェオルの中には高低差がある。
 - (4) 「シェオルに下る」という表現に見るように、方向感覚としては下方である（I

サム 2 : 6、I 列 2 : 6、9、ヨブ 7 : 9、11 : 8、17 : 16、21 : 13、詩 30 : 3、箴 5 : 5、7 : 27、15 : 24、イザ 5 : 14、14 : 9、アモ 9 : 2「よみに入り込んでも」、下線部は直訳すると「地面を掘り抜いて行って～に至る」

- (5) シェオルに下った人々には、意識がある (イザ 14 : 9～10、ヨナ 2 : 2)
 (6) シェオルにも、神の支配は及んでいる (ヨブ 26 : 6、詩 139 : 8)

2. ハデス (ギリシア語) = 日本語訳聖書 (新改訳) では訳さずに「ハデス」と表記

(1) 使徒 2 : 27 「あなたは私のたましいをハデスに捨てておかず」・・・この箇所は旧約聖書の詩 16 : 10 の引用。ヘブル語のシェオルをギリシア語では「ハデス」として訳している。→ シェオルとハデスは、同じ場所を指していて、そこをヘブル語ではシェオル、ギリシア語ではハデスと呼ぶ。

(2) ルカ 16 : 19～31

- ① 義人のラザロもそうでない金持ちも、ともにハデスに行った → シェオルの (1) と同じく、義人も、そうでない人も、共に、死者の霊魂が行く先、それがハデスであった。使徒 2 : 27 歴史上で唯一人、ご自身の行いで完全に正しい人であったイエスも、十字架上で死んだ後、その霊魂はハデスに行った。
 ② ハデスの中には、2つの主要区分がある。義人でない人たちのための場所 (狭義のハデス) と、義人たちのための場所 (別名、「アブラハムのふところ」、この用語については後述する) の2つである。
 ③ 義人でない金持ちは狭義のハデスの中で、苦しんでいた。ハデスは、義人でない人たちにとっては、苦しみの場所である。
 ④ ハデスの中にいる人々には、意識がある。
 (3) マタ 11 : 23、ルカ 10 : 15 「ハデスに落ちる」という表現に見るように、ハデスへの方向感覚は、下方である。
 (4) 黙 20 : 14 「死とハデスとは、火の池に投げ込まれた」→ この意味内容については、後述の **9. 火の池** の解説で扱う

3. アバドン (ヘブル語) = 日本語訳「滅びの淵」、英語訳「the Place of Ruin」


- (1) アバドンとは、ヘブル語で「滅び」、「破壊」という意味。旧約聖書では 6 回 (ヨブ 26 : 6、28 : 22、31 : 12、詩 88 : 11、箴 15 : 11、27 : 20)。
 (2) 新約聖書では 1 回 (黙 9 : 11)。この箇所は、悪霊の呼称として「アバドン」(破壊者) が使用されており、死者の霊魂の行く先の場所としてではない。
 (3) 旧約聖書での 6 回は、ヨブ記、詩篇、箴言の 3 つの書である。これら 3 つの書はいずれも詩の文型で書かれている。ヘブル語の詩の特徴は、音の韻を踏むのではなく、並行表現である。並行表現とは、同じことを別の言葉で繰り返して表現することである。6 回のうち、3 回はシェオルと並行して使われている (ヨブ 26 : 6、箴 15 : 11、27 : 20)。よって、シェオルとアバドンとは同じ意味内容を持った言葉である。
 (4) アバドンは、肯定的に良いものといったニュアンスで使われることは一度もなく、

必ず否定的で悪しきものといったニュアンスである。




- (5) ③と④を合わせて見ると、アバドンとは、シェオル＝ハデスの中の、苦しみ
の場所、すなわち義人ではない人たちが行く場所を指す。


4. 旧約聖書の中で、日本語訳「穴」、英語訳「the Pit」

- (1) 旧約聖書のヨブ記、詩篇、箴言、イザヤ書、エゼキエル書には、目に見えない世界を「穴」と表現している箇所がある。使用されるヘブル語はいくつかあるが、代表的なものは2つ、シャクハス と ボウア である。

①  シャクハス：「穴」、特に動物や敵兵を罠にかけるための落とし穴を指す。滅び、墓、といった意味もある。

②  ボウア：「穴」、特に貯水槽や牢獄として使う地下の穴を指す。

- (2) イザヤ 38：17 「滅びの穴  シャクハスから私のたましいを引き戻された」
 (3) 詩 30：3 「あなたは私のたましいをよみ  シェオルから引き上げ、私が穴  ボウアに下って行かないように私を生かしておられました」→ ここも並行表現。シェオルと同じ意味内容の言葉として使われている。この箇所のほかにも、シェオルと並行表現するのは、箴 1：12、イザ 38：18。

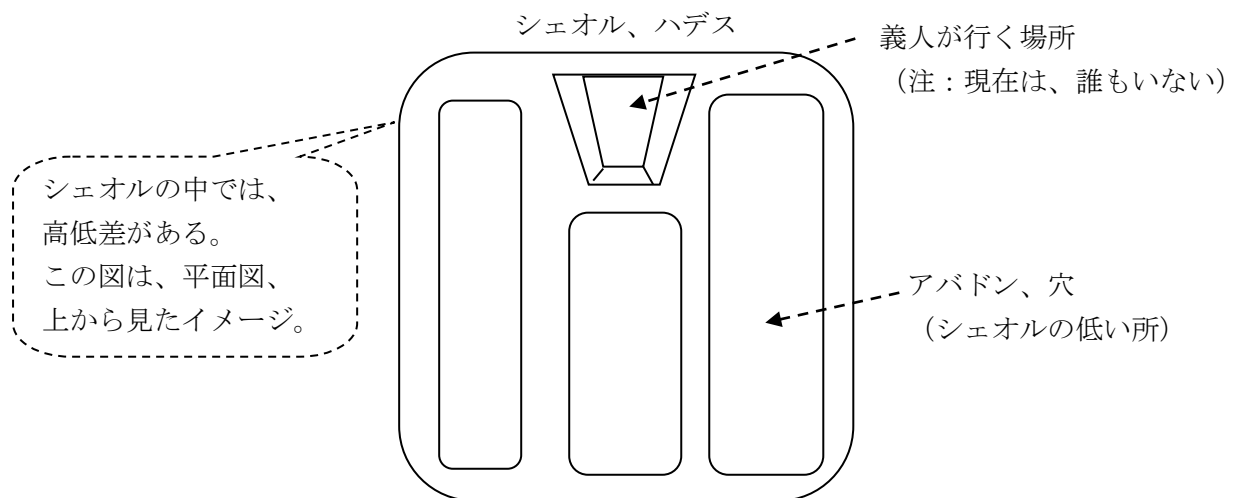
- (4) エゼキエル書には、「穴  ボウアに下る者」という表現が多く使われている（26：20、31：14、16、32：18、24、25、29、30）

- (5) これらの箇所から、「穴」という表現は、シェオル＝ハデスの中の、苦しみ
の場所、すなわち義人ではない人たちが行く場所を指す。ヘブル語のアバドンは、その場所の呼び名であるのに対して、「穴」というのはその場所の形態を説明することばとして使用されている。アバドンも「穴」も共に、同じ場所を指している。

シェオルはヘブル語、ハデスはギリシア語で、同じ場所を指す。

その中には、義人が行く場所と、義人でない人たちが行く場所がある。

義人でない人たちが行く場所を、ヘブル語ではアバドンと呼び、「穴」とも表現する。



5. アブソス (ギリシア語) : 英語読み Abyss アビス、日本語訳「底知れぬ所」
- (1) アブソス (ギリシア語) は、「底なしの深み」という意味。英語圏ではアビスと発音し、どん底、奈落の底、底知れない割れ目、深淵などの意味になる。
- (2) 新約聖書で9回、そのうち7回は黙示録
- ① ルカ 8 : 31 悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。
 - ② ロマ 10 : 7 だれが地の奥底に下るだろうか
 - ③ 黙 9 : 1 その星には底知れぬ穴を開く鍵が与えられた。
 - ④ 黙 9 : 2 その星が底知れぬ穴を開くと、
 - ⑤ 黙 9 : 11 底知れぬ所の御使い (訳語「御使い」原文「天使」、ここは墮天使)
 - ⑥ 黙 11 : 7 底知れぬ所から上ってくる獣 (「獣」=反キリスト)
 - ⑦ 黙 17 : 8 あなたの見た獣は、・・・底知れぬ所から上ってきます
 - ⑧ 黙 20 : 1 御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、天から下って来る (この「御使い」は、聖なる天使)
 - ⑨ 黙 20 : 2~3 彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕らえ、これを千年の間縛って、底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解き放されなければならない。
- (3) アブソスへの方向感覚は、常に下方である。
- (4) アブソスは、一般の人間には関係ない。
- ① アブソスに関係するのは、サタンと墮天使 (悪霊)、そして反キリストである。
 - ② 反キリストは、「サタンの子孫」(創 3 : 15) であり、サタンと人間の女性との間に生まれた子である。それゆえ、反キリストは、半分は天使的存在である。
 - ③ 反キリストは、黙 11 : 7 と 17 : 8 においてアブソスと関係する。
- (5) アブソスは、墮天使 (悪霊) たちを一時的に閉じ込めておく場所
- ① ルカ 8 : 31 に見るように、悪霊の追い出しの際に、追い出された悪霊がアブソスに閉じ込められる場合があったようである。
 - ② アブソスに閉じ込められている悪霊たちは、黙 9 章では一斉に解放されて、地上で活動する。第 5 のラッパでの「いなご」、第 6 のラッパでの「2 億の騎兵の軍勢」、いずれもアブソスから解放された悪霊たちである。これらのわざわいは、大患難期の前半において起きる。
 - ③ 黙 11 : 7 と 17 : 8 では、反キリストが覇権争いの戦争において一度死んで、その霊魂はアブソスに下る。そして彼は生き返って地上に戻る。これは大患難期の中間で起きることである。
 - 反キリストは、この生き返りによって勢力を得て、世界を征服する (黙 11 : 7~10、13 : 1~18)
 - 反キリストの世界制覇の期間は、大患難期の後半 3 年半である。その末期に、メシアが再臨する。
 - 反キリストは、再臨のメシアによって殺される (II テサ 2 : 8)。彼の霊魂

はシェオルに下る（イザ 14：3～11）。そこには人間の死者たちの霊魂がいるので、アブソスではなく、アバドンである。

- 反キリストの死体は葬られることなく、放置される（イザ 14：16～21）。
 - その後、反キリストは復活させられて、「硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれる」（黙 19：20）。火の池については、後述。
- ④ 黙 20 章ではサタンがアブソスに閉じ込められる。これは大患難期が終わった後に起きる。サタンが拘束される期間は千年間であり、千年ののちに解放される。

アブソスは、墮天使（悪霊）たちを一時的に閉じ込めておく場所である

6. タルタロス（ギリシア語）：英語読み Tartarus タータラス

- (1) ギリシア神話における暗黒の下界の名、ハデスよりも下にある深淵。呪われた者たちが閉じ込められる場所。
- (2) II ペテ 2：4「神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。」
- ① 罪を犯した御使いたち：聖なる天使は罪を犯すことはできない。この天使は、墮天使、悪霊である。
- ② 地獄に引き渡し：地獄と訳されているギリシア語は、ゾフォウ、暗やみ
- ③ 二重下線部は、タルタロウという動詞 1 語。「タルタロスへ落す」という意味の動詞である。
- ④ さばきの時まで：黙 20：10～15 の「大きな白い御座のさばき」まで
- (3) タルタロスに閉じ込められたのは、ある種の罪を犯した墮天使たちである。どのような罪かというと、II ペテ 2：2～8 の前後の文脈から、第一に「好色」と関係する、第二に「ノアの洪水」と関係する。→ 創世記 6 章に記された事件、墮天使たちが人間の女たちと雑婚した罪である。
- (4) II ペテ 2 章は教会の中に偽教師が現れることの預言である。その預言のとおり偽教師が現れたとして信者たちに緊急告知した手紙が、ユダの手紙である。ユダの手紙の中に II ペテからの引用が多いのは、そのためである。
- (5) ユダ 6～7「主は、自分の領域を守らず、自分がおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。また、ソドム、ゴモラおよび周囲の町々も彼らと同じように、好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めたので、永遠の火の刑罰を受けて、みせしめにされています」
- ① 下線部の「暗やみ」はギゾフォウ、II ペテ 2：4 の預言を受けている。
- ② 墮天使たちは、「自分の領域を守らず、自分がおるべき所を捨てた」、「好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めた」。これは、創世記 6 章の事件、墮天使た

ちが人間の女たちと雑婚したことを指す。

- ③ 大いなる日のさばきのために：黙 20：10～15 の「大きな白い御座のさばき」を指す
- ④ 永遠の束縛をもって：この墮天使たちが解放されることは決してなく、彼らがタルタロスから出るときは、大きな白い御座のさばきを受け、そのまま火の池に投げ込まれるときである。
- ⑤ タルタロスは創世記 6 章で人間の女たちと雑婚した墮天使たちを「大きな白い御座のさばき」のときまで閉じ込めておく場所である。
- タルタロスでは、閉じ込められた墮天使たちが解放されることはない。それとは異なり、アブソスでは、いったん閉じ込められた墮天使たちが解放されることがある（黙示録 9 章）。
 - 従って、サタンが千年王国の間閉じ込められるのは、タルタロスではなく、アブソスである。千年間拘束されたのち、解放されなければならないからである（黙 20：3）
- (6) 創世記 6 章で雑婚の罪を犯した墮天使たちの動機は、「人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者を選んで、自分たちの妻とした」（創 6：2）である。これを、ユダの手紙は、「好色にふけり、不自然な肉欲を追い求めた」と指摘している。天に在るべき靈的被造物である天使が、人間の男の姿をもって地上に現れて、人間の女と性的関係を持った。これは「不自然な肉欲」である。
- (7) 天使は、聖なる天使でも、墮天使でも、階級的な組織に編成されている。墮天使のトップは、サタンである。サタンを頂点とする墮天使たち、すなわち悪霊の国（マタイ 12：26）が形成されている。創世記 6 章の事件は、サタンが、創 3：15 「女の子孫」の預言で告げられたメシアの登場を阻止することを真の目的として、墮天使たちの好色を利用した事件である。
- ① 創 3：15 は、蛇、すなわち蛇の背後にいたサタンに対して語られた預言である。メシアは、「女の子孫」として生まれて来て、サタンを打ち砕く。
- ② 創 6：4、墮天使たちと人間の女たちとの雑婚によりできた子どもたちは、「ネフィリム」と呼ばれる。
- ヘブル語のネフィリムとは、「墮落した者たち」という意味。
 - 英語訳聖書では **giants** ジャイアンツ＝巨人たち、と訳されているが、ヘブル語のネフィリムに、巨人とか体格が大きいという意味はない。
 - 英語訳聖書が **giants** という英語に訳した理由は、ヘブル語聖書をギリシア語に訳した七十人訳聖書が、このネフィリムを^ギギゲンテス **gigentes** と訳していたからである。英語の **giant** は、ギリシア語のギゲンテスに由来するが、意味は変質して「巨人」になってしまった。
 - 本来の^ギギゲンテスは、ギリシア神話で「半分は人間、半分は神」である超人を意味する。ラテン語ではタイタンである。
- ③ ネフィリムも、超人的であった。彼らは「昔の勇士であり、名のある者たちであった」（創 6：4）。しかし、この一文は、同時に、ネフィリムはみな男で

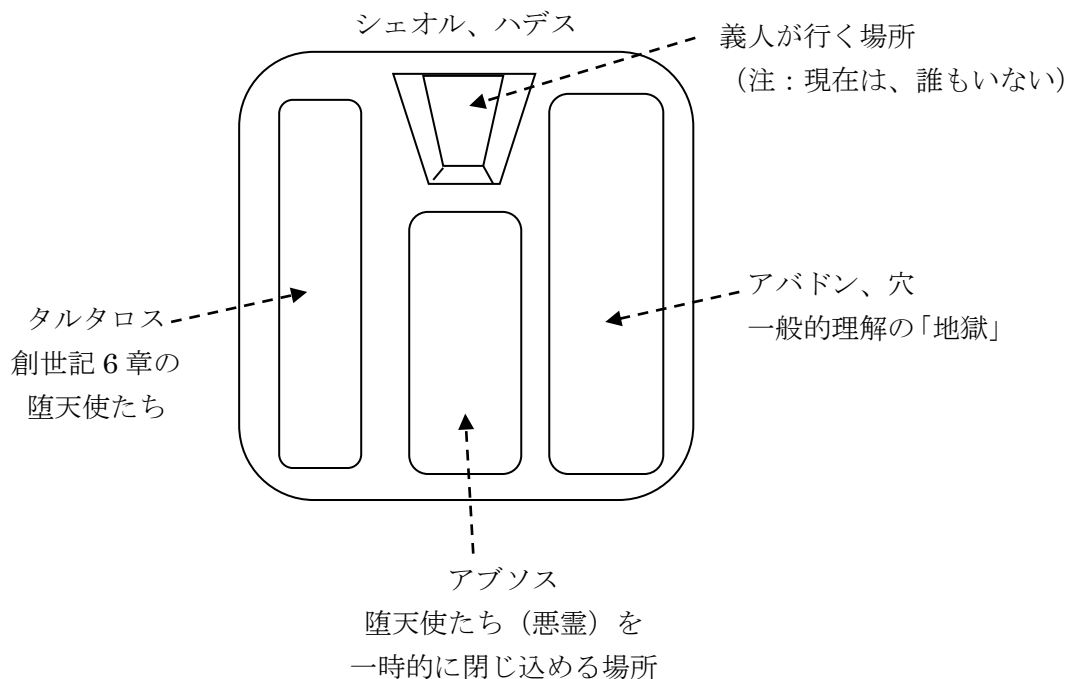
あったことを示している。墮天使たちと人間の女との雑婚によりできた子どもたちは、全員が男であったということは、人類から女がいなくなり、その結果、「女の子孫」であるメシアは登場できなくなる、ということである。

- ④ 神は、雑婚が始まったとき、「120年」(創6:3)という猶予期間を設け、ノアを通して神のことばを人々に伝えた(ヘブル11:7)。
- ⑤ ノアは、120年間かけて箱舟を建造し、この間、神の警告を宣べ伝え続けた(ヘブル11:7)。この信仰により、「ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。ノアは神とともに歩んだ」(創6:9)
- ⑥ ネフィリムが地上に蔓延すると、「地上に人の悪が増大した」(創6:5)。彼らは能力的には優れていても、倫理的にはネフィリム、まさしく「墮落した者たち」であった。ネフィリム化した人類に対する神のさばきが、ノアの洪水である。
- ⑦ 神は、人間の女と雑婚した墮天使たちを容赦せず、タルタロスに閉じ込めた。
- ⑧ 時が満ちて、紀元前7年頃、女の子孫の預言の通り、メシアは処女マリアから生まれた。そして紀元30年、十字架の上で贖いの死を遂げ、その霊魂はハデスに下った。下った先は、ハデスの中の義人たちが行く所である。
- ⑨ 1ペテ3:19「その霊において、キリストは捕らわれの霊たちのところに行つて、みことばを語られたのです。」
 - 捕らわれの霊たち=ハデスの中のタルタロスに閉じ込められている墮天使たち。20節には「昔、ノアの時代に、箱舟が造られていた間、神が忍耐して待っておられたときに、従わなかった霊たちのことです」とあるように、彼らは創世記6章の墮天使たちである。
 - メシアが下った先は、同じハデスの中でも、義人たちが行く所、すなわち「アブラハムのふところ」である。そこからは、タルタロスを見下ろすことができる。タルタロスには、創世記6章の墮天使たちが永遠の束縛を受けて、収容されている。
 - みことばを語られた:「みことばを」は原文にない。ギリシア語は一言、ケイルツ、宣言する、である。勝利を宣言する、あるいは、さばきを宣告する、というときに使うことばである。
 - メシアが何を宣言したのかは記録されていないが、歴史的経緯を踏まえると、女の子孫の預言が成就したことの宣言、すなわちメシアの勝利宣言であろう。

タルタロスは、創世記6章で人間の女たちと雑婚した墮天使たちを「大きな白い御座のさばき」のときまで閉じ込めておく場所である。

7. 地獄：英語 Hell

- (1) Hell は、ゲルマン民族のひとつ、チュートン族の言語に由来する。
- ① 元の意味は、隠す、覆う、である。
 - ② 聖書の中では、Hell に相応する単語は、ヘブル語にもギリシア語にもない。
- (2) 英語の Hell という単語は、英語圏では目に見えない世界、特に義人でない人の霊魂が死後に行く先の場所として、最も一般的に使われることばである。日本語では「地獄」と訳される。地獄は仏教用語であるが、仏教の専門的知識がない大半の日本人にとって、日本語の地獄は、ほぼ英語の Hell に似た語感のことばとしてよいであろう。
- (3) 英語の Hell と聞いて一般的にイメージされるのは、「悪人がそこに落ちる」、「救われていない人が、そこに落ちる」である。
- ① 墮天使や悪霊がそこに閉じ込められるといった理解はない。
 - ② 英語の Hell は、天国に行けなかった人が行く場所である。このイメージに最も近いのは、シェオルの中で、義人ではない人たちの霊魂が行く所、すなわち、ヘブル語で「アバドン」と呼ばれる場所である。



8. ゲヘナ

- (1) ゲヘナはギリシア語であるが、ヘブル語の二つの単語に由来する。「ゲイ」と「ヒノム」である。
- ① ゲイは谷、ヒノムはある谷の名称で、「ヒノムの谷」である。
 - ② エルサレムの町は、北側だけが、なだらかな地形につながる。主要道路との連絡は北側である。
 - ③ それに対して、町の三方は深い谷になっている。難攻不落と言われるのは、このためである。町の西側から南側にまわりこんでいる谷がヒノムの谷。東側に沿って下ってきているのがキデロンの谷である。
 - ④ イスラエル王国の歴史上、南王国ユダの時代は、ダビデ王朝の中で不信仰な悪王と信仰ある善王が入れ替わり登場する。悪王たちが偶像崇拜をして人身犠牲を捧げた場所が、ヒノムの谷である。人身犠牲を捧げるというのは、具体的には人身を火で焼く行為である（Ⅱ列 23 : 10、Ⅱ歴 28 : 3, 33 : 6、イザ 30 : 33、エレ 7 : 31~32、19 : 1~15）。
 - ⑤ ここから、目に見えない世界で永遠に人間の体を火で焼く場所について、ゲイ・ヒノム→ゲヘナという呼称がつけられた。
- (2) 聖書では、ゲヘナは 12 回使われている。そのうち 11 回は福音書の中である（マタ 5 : 22、29、30、10 : 28、18 : 9、23 : 15、23 : 33、マルコ 9 : 43、45、47、ルカ 12 : 5、ヤコブ 3 : 6）
- (3) ゲヘナでの刑罰は、たましいと体の両方が対象である（マタ 10 : 28）。この点では、「シェオル、ハデス、アバドン、穴、地獄」とは、ゲヘナは全く別の世界である。
- ① シェオルの中のアバドンで刑罰を受けるのは、霊魂だけである。体はない。
 - ② ゲヘナは、たましいと体の両方が刑罰の対象である。体の復活のあと、義人ではない人々が行く先が、ゲヘナである。
- (4) シェオルの中のアバドンは、ゲヘナに行くまでの時限的な刑罰の場所である。それに対して、「燃えるゲヘナ」（マタ 18 : 9）は、「永遠の火」（マタ 18 : 8）ともあるように、永遠の刑罰である。
- (5) ゲヘナでの刑罰は、「燃えるゲヘナ」、「永遠の火」とあるように、火と関係する。
- (6) 「永遠の火」という表現は、マタ 25 : 41 にもある。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。」
- ① ゲヘナは、本来、悪魔と墮天使たちを永遠に収容するために神が用意された。
 - ② よって、人だけでなく、悪魔と墮天使たちもそこに投げ込まれる。

ゲヘナは、シェオルハデスと呼ばれる場所とは、別である。
 霊魂だけでなく、からだも持って、永遠の刑罰を受ける場所である。
 本来は、サタンと墮天使たち（悪霊たち）のために用意された場所である。

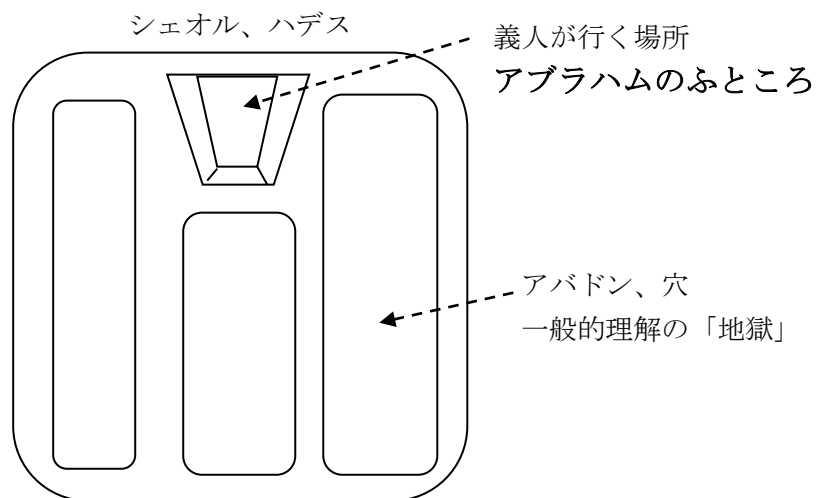
9. 火の池

- (1) 聖書の中では4回使われている。そのすべてが黙示録である。
- ① 黙 19:20 このふたりは(反キリストと偽預言者)、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。
 - ② 黙 20:10 そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。
 - ③ 黙 20:14 死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。
 - ④ 黙 21:8 おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。
- (2) 黙 20:10 → 火の池は、失われた者たちすべての永遠のすみかである。黙 20:10 では、火の池に投げ込まれるのは、救いを受け取らなかった人だけでなく、悪魔も含まれる。
- (3) 黙 20:14 「死とハデスとは、火の池に投げ込まれた」
- ① 「死」は、人の物質的部分、すなわち体を指し示す。
 - ② 「ハデス」は、人の非物質的部分、すなわち霊魂を指し示す。
 - ③ 火の池は、体と霊魂の両方に関係する刑罰である。これを第二の死という。
- (4) 黙 21:8 → 火の池での刑罰では、火と燃える硫黄とが関係する。
- (5) 以上のように見えてくると、ゲヘナと火の池とは同じものである。

火の池は、ゲヘナと同じものである。

10. アブラハムのふところ

- (1) ユダヤ教の教師ラビの用語としては、ごく一般的であるが、聖書の中では1回だけ、ルカ 16 : 22~23 に出て来る。「この貧しい人は死んで、御使いたちによって アブラハムのふところに連れていかれた」(ルカ 16 : 22)
- (2) アブラハムのふところには、義人だけしかいない。義人ではない人は、アブラハムのふところには誰一人としていない。
- (3) アブラハムのふところは、地獄と隣接している。地獄の中にあるのではなく、地獄と隣り合わせになっている。そのため、地獄の中にいる人、ルカ 16 章では「金持ち」がそうであるが、彼はアブラハムのふところで誰が何をしているか、その様子を見ることができた。ただし、見ることはできても、そこへ行くことはできなかった。
- (4) アブラハムのふところと地獄とは、越えることのできない淵によって隔てられていた。それぞれの側にいる人たちはお互いに見ることはできたし、会話をすることもできた。しかし相互に行き来することはできなかった。
- (5) アブラハムのふところは、シェオルまたはハデスの中の一部である。地獄も、シェオルまたはハデスの中の一部である。何が違うかという、アブラハムのふところは、義人たちのための部分であるのに対し、地獄は義人ではない人々のための部分である。
- (6) アブラハムのふところという表現は、食事のときの姿勢と関係する。食卓につくときは、脇腹を下にして横になり、隣の人のお腹に寄り掛かるような恰好になる。ヨハネの福音書の過越の食事のときの記事では、弟子のヨハネがイエスのふところに寄り掛かっていたように、である。ここではラザロがアブラハムのふところに寄り掛かるようにして食卓についている。乞食だったラザロが、アブラハムの隣で食事をしているという光景である。
- (7) アブラハムのふところという表現は、死後の祝福を象徴している。ラザロは地上の生活では十分なものを得ていなかったけれども、死後は祝福を受けて満ち足りている。



11. パラダイス

- (1) ギリシア語で、「王の庭園」を意味する。
- (2) 新約聖書で3回使われている。
 - ① ルカ 23：43 「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」
 - ② IIコリ 12：2～4 「・・・第三の天にまで引き上げられました。・・・パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いた」
 - ③ 黙 2：7 「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう」
- (3) パラダイスはどこにあるのか。パラダイスは時期によってその位置を変えていく。
 - ① ルカ 23：43 →メシアが十字架の上で贖いの死を遂げ、その霊魂がハデスに下ったとき：ハデスの中、義人たちの行く先、アブラハムのふところ
 - ② IIコリ 12：2～4 →パウロが第三の天に引き上げられたとき：第三の天の中
 - ③ 黙 2：7 → 黙 22：1～2 新しい天と地が造られ、その地上に神の都が置かれたとき：都の大通りの中央をいのちの水の川が流れる。川の両岸に、いのちの木がある。この都が「神のパラダイス」である。
- (4) 言い換えると、パラダイスの位置は、過去・現在・未来で次のように変化する。
 - ① 過去：シェオルまたハデスの中にあった。
 - ② 現在：第三の天の中にある。
 - ③ 未来：新しい天と地が造られ、その地上に神の都、新しいエルサレムが置かれると、パラダイスはその都の中にある。
- (5) パラダイスが第三の天に移ったのは、いつ、どのように？
 - ① エペソ 4：8 「高いところに上られたとき、彼は多くの捕虜を引き連れた」
 - 高い所に上られたとき＝メシアの昇天
 - 多くの捕虜＝「アブラハムのふところ」にいた義人たち、アダムをはじめとする旧約の義人たち
 - ② この箇所は、詩篇 68：18 の引用。詩篇 68：27 には、義人たちの中に、ヤコブの末子ベニヤミンもいると預言されていた。
- (6) ルカ 24：50～51、使徒 1：4～12 → オリーブ山からメシアが昇天したとき、メシアはひとりである。ベニヤミンたちを天に連れて上ったのはいつか？
 - ① オリーブ山からの昇天の前にも、メシアは天に上っている。
 - ② 復活直後、最初に会ったマグダラのマリヤには、イエスはご自身に触れさせず、次のように言われた。ヨハ 20：17 「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」
 - ③ この後に会った女たちには、イエスはご自身に触れさせて、行先も天ではなく、ガリラヤであると告げた。マタ 28：9～10 「すると、イエスが彼女たちに出会って、『おはよう』と言われた。彼女たちは近寄って御足を抱いてイエ

スを押んだ。すると、イエスは言われた。『恐れてはいけません。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤに行くように言いなさい。そこでわたしに会えるのです』

- ④ この二つの出来事の間、メシアは天に上って、また地上に戻っておられる。
- (7) この昇天の目的は何か
- ① メシアの職務は、「預言者→大祭司→王」である
 - ② 「大祭司」としての立場は、十字架にかかる前から再臨までの期間である。
 - ③ メシアの大祭司としての第一の任務は、栄光の体すなわち復活の体を身にまとい、ご自身の血を携えて、天の幕屋に入り、天の幕屋を清めることである（ヘブル 9：11～12、23～26）。天の幕屋の汚れは、悪魔の出現によって発生したものである（エゼ 28：11～19）
 - ④ モーセの律法において、大祭司は、聖なる装束を身につけ、水で洗い、油を注がれて聖別された。聖別されたなら、任務が終わるまで、他の者が触れてはならない（出 40：12～14、出レビ 8：6～13、33～35）。イエスがマグダラのマリヤに触れさせなかったのは、大祭司の任務を果たす前だったからである。
- (8) パラダイスは、時期によりその位置を変えるが、常にその場所は義人たちのための場所である。メシアが昇天したときに、旧約の義人たちは第三の天の中に移された。その結果、パラダイスは、今、第三の天の中にある。
- (9) ハデスの中にあつた「アブラハムのふところ」には、今は、誰もいない。空っぽである。

